

中学生を対象とした万引き防止のための教育 プログラムの開発と実践

岡田 涼 ・ 大久保 智生 ・ 時岡 晴美 ・ 七條 正典
(発達臨床) (学校教育) (人間環境教育) (附属教育実践総合センター)

松浦 隆夫* ・ 大前 和弘** ・ 三好 一生***
(香川県警察本部少年課) (附属坂出中学校) (附属高松中学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*760-8579 高松市番町4-1-10 香川県警察本部少年課
**762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校
***761-8082 高松市鹿角町394 香川大学教育学部附属高松中学校

Development and a Practice of Educational Program toward Prevention of Shoplifting in Junior High School Students

Ryo Okada, Tomoo Okubo, Harumi Tokioka, Masanori Shichijo,
Takao Matsuura*, Kazuhiro Omae** and Kazuo Miyoshi***

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Juvenile Section, Kagawa Prefectural Police Headquarters, 4-1-10 Ban-cho, Takamatsu 760-8579*

***Sakaide Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,
1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

****Takamatsu Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,
394 Kanotsuno-cho, Takamatsu 761-8082*

要旨 本論文では、中学生を対象に万引き防止のための教育プログラムを作成し、その実践事例を報告した。教育プログラムでは、①万引きに関する正しい知識を獲得すること、②万引きの背景と対策を自ら考えること、という2つの要素を柱とした。2つの中学校での実践を通して、今回作成した教育プログラムによって中学生が万引きに関する知識を身につけ、万引きの背景と対応についての多様な視点をもち得ることが示された。

キーワード 万引き防止 教育プログラム 中学生 万引き防止啓発動画

問題と目的

青少年がかかわる重要な社会問題の1つに万引きがある。万引きは、初発型非行やゲート

ウェイ犯罪といわれるように、より重大な非行や犯罪の入り口となりやすいとされている。また、万引きは様々な年代にみられる犯罪であるが、もっとも好発するのは青少年においてであ

り、その対策は青少年の非行や犯罪の防止にとって非常に重要な意味をもつ。

香川県では万引き対策が喫緊の課題となっている（大久保，2012）。人口比あたりの万引き認知件数について、香川県は2002年から2009年の7年間連続でワースト1位であり、万引きの多い県として知られている。このことを受けて、平成22年度に香川県警察と香川大学の共同事業として「子ども安全・安心万引き防止対策事業」が立ち上がり、県内の万引きの実態把握や万引きの背景要因に関する調査、万引き防止のための啓発動画の作成などが進められている。

青少年の万引き防止に有効な対策の1つとして、万引きの予防と再犯防止に向けた教育プログラムが挙げられる。小林（2008）は、非行防止の段階として、一次予防、二次予防、三次予防に区別している。一次予防は、問題行動が始まる前に、非行抑制因子の育成や知識の伝達によって未然防止を図るものである。二次予防は、問題傾向が出始めた者に対して、予防的な働きかけや相談活動を行うものである。三次予防は、非行を行った少年に対して、保護観察処分などの再犯防止を図る活動である。いずれの段階における対策も重要であるが、万引きが他の非行や重大な犯罪の入り口になりやすいということを見ると、一次予防にあたる教育プログラムが有効であると考えられる。実際、学校現場をはじめとして様々なところで、万引き防止教室や非行防止教室など万引きの予防を目指した実践プログラムが行なわれている。一方で、万引きを繰り返させないために、その入り口で対策を考えると意味では、三次予防にあたる再犯防止を目指した教育プログラムも重要である。

万引き防止のための教育プログラムを実践するうえでは、その内容が万引きの実態に沿うものでなければならない。特に、青少年の万引き対策を考えるうえでは、以下の3点を踏まえた教育プログラムが必要である。1つ目に、青少年の万引きには共犯者が存在する率が高いことである。万引き被疑者を対象とした調査では、

青少年の万引きにおいては半数に共犯者がおり、そのほとんどが同じ学校の仲間であることが示されている（大久保・堀江・松浦・松永・江村，印刷中）。また、青少年の万引き被疑者が語る犯行動機には、「友人に誘われて断れなかった」というものがみられる（皿谷・三阪・濱本・平，2011）。さらに、万引きを含む非行傾向行為の関連要因を検討した小保方・無藤（2006）は、逸脱傾向を示す友人の存在が本人の非行傾向と関連していることを明らかにしている。これらのことから、青少年の万引き防止は、友人との関係のなかで考えていくことが不可欠であるといえる。

2つ目に、家族の対応が青少年の万引きの抑止につながることである。大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡（2012）は、万引きの被疑者において、家族からの否定的反応を予想したほど後悔が強いことが示されている。一般の青少年においても、家族との関係が良好であるほど、万引きに関する規範意識が高いことが示されている（大久保・堀江・松浦・松永・宮前・宮前・岡田・七條，2012）。他にも、両親との関係の良好さが万引きを含む非行傾向行為の少なさを予測することが報告されている（小保方・無藤，2005）。これらのことから、万引きの当事者となる青少年本人だけでなく、万引きの際の家族の反応や対応にも注目することが必要である。

3つ目に、一般的に万引きに関する規範意識は高いことである。個人差はあるものの、被疑者は一般の青少年と同程度に万引きに関する高い規範意識をもっている（大久保・堀江・松浦・松永・江村，印刷中）。秦（2000）は、小学生から高校生に対して非行や問題行動に対する規範意識を尋ねた調査結果から、現代の若者の規範意識の低下を問題視しているが、そのデータにおいても中学生の万引きに対する規範意識は、「絶対にしてはいけない」が87.8%であり、全体的には高いものであった。そのため、教育プログラムにおいて、万引きが悪いことであるという規範意識を教授するだけでは、教育的な効果は期待できないと考えられる。

本論文では、上記の万引きに関する実態を踏まえたうえで、青少年向けの万引き防止のための教育プログラムを作成し、中学生を対象とした実践を報告する。教育プログラムでは、①万引きに関する正しい知識を獲得すること、②万引きの背景と対策を自ら考えること、という2つの要素を柱とする。まず、万引きに関する正しい知識を獲得させるために、香川県の万引きの実態や特徴に関するクイズを導入する。根岸(2011)は、高校生を対象とした犯罪について考える授業の開発と実践を行い、犯罪に対する生徒の認識と犯罪の実態とのズレを提示することの有効性を示している。自分たちの地域における万引きの実態に関するクイズに解答し、その解説を聞くことによって、正しい知識を得ることをねらいとする。次に、万引きの背景やその対応策について自ら考えさせるために、万引き防止のための啓発動画(大久保・時岡・有馬・松浦・高橋, 2012; 時岡・大久保・有馬, 2012)を用いて、登場人物の心情やストーリーの展開に関するグループディスカッションを導入する。他者とのディスカッションを通して、万引きを行った青少年の心情を考えることで、万引きの背景に対する多様な見方を知ることができると思われる。単純に万引きの問題を個人に焦点化せず、背景を多様な観点から理解し、幅広く対応策を考えていく姿勢を身につけることをねらいとする。

方法

対象者

香川大学教育学部附属坂出中学校(以下、附属坂出中学校)と香川大学教育学部附属高松中学校(以下、附属高松中学校)の生徒を対象に教育プログラムを実施した。対象者は、附属坂出中学校の1年生3クラスの生徒118名(男子55名, 女子63名)と附属高松中学校の1年生3クラスの生徒122名(男子63名, 女子59名)であった。

実施時期

附属坂出中学校では2012年9月に実施し、附

属高松中学校では2012年10月に実施した。

実践の流れ

教育プログラムの作成と実践は次のような流れで行った。まず、著者の間で教育プログラムの構成について検討した。そのなかで、①万引きに関する正しい知識を獲得すること、②万引きの背景と対策を自ら考えること、を教育プログラムの柱とすることを決定した。①万引きに関する正しい知識を獲得することに関しては、万引きの実態や法律上の位置づけなどについてクイズの形式で生徒に問いかけ、生徒が自分で考えたのちに解答を提示することとした。②万引きの背景と対策を考えることに関しては、万引きに関する短いストーリーをもとに登場人物の心情や展開を考えるグループディスカッションを行うこととした。

次に、教育プログラムの流れとプログラムで用いるワークシートを作成した。今回の教育プログラムは、いくつかの学校での試行と評価を経た後、学校現場に普及させ、それぞれの学校において実践してもらうことを想定している。そのため、教育プログラムの流れについては、現職教員が活用しやすいように指導案のかたちにまとめることとした。指導案の作成過程では、現職教員の意見を求めながら、調査データから明らかにされた内容を反映させつつ、上記の2つの柱を含んだ授業展開を考えていった。指導計画は全1時間であり、目標は、「(ア)万引きについての正しい知識を得て、特に中学生の万引きの現状を理解し、(イ)万引き犯にもそれぞれの背景があり、悪いということをわかっているながら万引きしてしまうことを知り、(ウ)万引きをする以外の選択肢があることに気づき、万引きする友人を助けようとする態度を養う」とした。ワークシートについては、前半に香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業(2011)等の調査データにもとづくクイズ10問とその解説を含み、後半には万引き防止の啓発動画(大久保・時岡他, 2012; 時岡他, 2012)の登場人物を写真で提示し、彼らの心情や対応策について書き込む欄を設けた。

教育プログラムの実践は、まず附属坂出中学

校で行った。前述の通り、本プログラムを学校現場に普及させていくことを意図しているため、実施は対象クラスの担任教員にお願いした。事前に指導案、ワークシート、啓発動画のDVDをもとに実施方法について協議し、意見を踏まえてワークシート等を微修正した後、1年生の3クラスで同時に実施してもらった。実施に際して、全体の流れは統一するものの、グループで話し合いの際のグループの人数や背景を考える登場人物の班ごとの割り当て方などの細かい点は、各教員によって工夫してもらうようにした。実施後、担当教員から意見を聞き、また実施の様子を観察を踏まえて、指導案とワークシートの微修正を行った。附属坂出中学校で特に問題となった点は、ワークシート内での書き込み欄の多さと時間配分であった。そのため、書き込み欄を少なくするかたちでの修正を行った。その後、修正した指導案とワークシートをもとに附属高松中学校の担当教員と協議を行い、プログラムの実施手順について確認したうえで3クラス同時に実施してもらった。ここでも実際の実施方法の細部については各担当教員に委ねた。いずれの学校においても、著者はプログラムの実施時に観察者として教室に入った。

万引き防止のための啓発動画のあらすじ

動画では、3人の少年（哲郎、キヨト、れん）が万引きに至ってしまうストーリーが描かれている。主人公は哲郎である。3人の力関係は、キヨトがリーダー格であり、れんはキヨトに追従し、哲郎がもっとも発言力が弱い立場にある。最初、じゃんけんによってキヨトが万引きをすることになり、哲郎は戸惑いながらも2人についていく。3人で書店に入っていく、哲郎とれんが見張り役をするなか、キヨトは万引きに成功して店を出る。その後、キヨトがもう一度万引きを実行することを提案し、じゃんけんによって哲郎が万引きを実行する役になる。同じ書店に入って、哲郎は万引きをして逃げようとするが、店長に捕まってしまう。同時にキヨトとれんも捕まり、3人一緒に書店の事務所に連れていかれる。書店の店長はその場で警察

に連絡し、到着した2人の警察官によって3人の少年は警察署に連れていかれる。取調室で待っているときに、警察官から担任教師と保護者に連絡したことが告げられるが、れんの両親だけは仕事のために来られない。まず担任教師が現れ、3人を叱責する。次に、キヨトの母親が登場し、万引きの事実を疑い、警察官に詰め寄る。ほぼ同時に哲郎の母親が現れ、警察官に対して土下座をして謝る。それを見た哲郎は、一緒に土下座をして謝り、二度と万引きをしないことを誓う。キヨトとれんもしぶしぶながら万引きしたことをその場で謝る。その後、れんは担任教師と、キヨトは母親と帰っていく。哲郎と母親は警察署を出たところで再度頭を下げ、警察官から万引きをすれば誰かが必ず見ているということを諭され、哲郎が返事をしたところで動画は終了する。全体の時間は約10分である。

教育プログラムの流れ

プログラムの概略をTable 1に示す。全体的な流れは、2つの中学校ともほぼ同じであった。教育プログラムは1冊のワークシートに基づいて実施された（Figure 1）。

①導入 香川県における万引きの実態について、先行研究（香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業、2011）での調査データをもとに作成した〇×クイズに各自で解答した。クイズの問題例は、「香川県は全国でも万引きの少ない県である」「万引き犯は万引きが悪いということをわからずに万引きをしている」などである。

②展開1 生徒がクイズに解答した後、正解を確認し、解説を行った。その際、香川県は万引きが多い県であること、全件通報が進んでいること、中学生の万引きは複数で行われやすいこと、万引きには周囲の人の対応が重要となること、などを確認するようにした。

③展開2 時岡他（2012）で作成された万引き防止啓発DVD青少年編「万引きはゲームじゃない」を視聴した。附属坂出中学校では、3人の少年が書店内で捕まったところで一度DVDを止め、その後の予想について生徒に尋ねた。

Table 1 教育プログラムの大まかな流れ

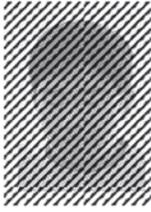
過程	内容
①導入 (5分)	○×クイズをもとに、万引きに関する自分の知識を確認する。生徒が各自でクイズに解答する。
②展開1 (15分)	○×クイズの解答を提示することで、万引きに関する知識(万引きとは何か、万引きするとどうなるか、香川県の万引きの現状など)を習得する。
③展開2 (20分)	万引きに関するショートストーリーを視聴し、中学生が万引きを行う背景について考える。最初にDVD動画を視聴し、登場人物の背景や心情について各自でワークシートに記入した後、それをもとにグループで話し合う。グループでの話し合いの後、クラスで意見を共有する。
④展開3 (5分)	ワークシートをもとに、万引きをせずに済むためにはどうすればよかったのかを考える。各自でワークシートに記入した後、グループで話し合う。
⑤終末 (5分)	万引きを減らすために、自分たちができることを考える。具体的には、「学んだことをどのように生活に生かすことができるか」「万引きしそうな友人がいたら何ができるか」について、ワークシートをもとに考える。
⑥授業後 (5分)	プログラムの効果として、アンケートに回答する。

DVDを見て考えましょう

3人の気持ちの理解

3人の気持ちについてそれぞれの立場に立って、なぜ万引きをしたのか、万引きしたことによって警察に連れて行かれ、母親や先生が来た後の気持ちについて考えてみましょう。

晋郎



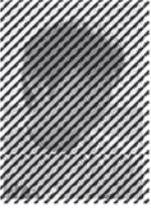
なぜ万引きをしたのか

警察に連れて行かれ、母親や先生が来た後の気持ち

なぜ万引きをしたのか

警察に連れて行かれ、母親や先生が来た後の気持ち

キヨト



れん



なぜ万引きをしたのか

警察に連れて行かれ、母親や先生が来た後の気持ち

注. 実際のワークシートでは登場人物の写真は鮮明に印刷されている。

Figure 1 教育プログラムで用いたワークシートの一部

附属高松中学校ではDVDを止めずに最後まで視聴した。視聴後、3人の少年について、3人が置かれている状況と万引きを行う際にどのような心情であったかをワークシートに記入し、それをもとにグループで話し合った。

④展開3 ワークシートをもとに、どうすれば万引きをせずに済んだのかをグループで話し合った。

⑤終末 プログラムのまとめとして、ワークシートをもとに、万引きを減らすために自分たちができることを考えた。具体的には、どのようにプログラムの内容を生活に生かしているか、まわりの友人が万引きをしようとしたときに何ができるかを考えた。

⑥授業後 プログラム終了後にアンケートに回答した。

効果測定のためのアンケート

①プログラム全体の印象 プログラム全体の印象を尋ねるために、大久保・時岡他(2012)と同様に「よかった」「感動した」「勉強になった」「ひきこまれた」の4項目を用いた。プログラムの全体的な印象について、各項目に「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

②万引きに関する実感 プログラムを通して万引きの特徴や実態について、どれぐらい実感が得られたかを調べるために、大久保・時岡他(2012)と同様の7項目を用いた(「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」「警察に通報することの重要性を実感した」など)。各項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

③万引きに対する態度 プログラムを受けたことで、生徒が万引きに関する問題に対してどのように関わっていこうとしているかを調べるために、万引きに対する態度を測定する項目を作成した。大久保・時岡他(2012)では、今回のプログラムで用いたDVD制作に関わった中学生や大学生において、万引き防止への関心、社会での万引き防止対策の必要性、万引きに関わる人の心情の理解などの面で変化が生じたこ

とが報告されている。また、今回の事業で作成した一連のDVDでは、地域ぐるみで万引き防止対策を考えていこうというメッセージを重視している(時岡他, 2012)。以上のことを踏まえて、万引きに対する態度として次の4つの側面を設定した。1つ目は、「万引きをした(しそうな)人へのかかわり」であり、身近に万引きをした人やしそうな人がいた場合に理解したり、積極的に関わろうとする側面である。2つ目は、「万引きをしない効力感」であり、自分が万引きをしないという意志や自信を示す側面である。3つ目は、「万引きに関する情報探索」であり、万引きに関する情報を自ら積極的に収集しようとする態度を示す側面である。4つ目は、「地域づくりへの意欲」であり、万引きがない地域を作ることに関与していこうとする態度を示す側面である。各側面について3項目ずつ計12項目を作成した。それぞれの項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

④感想 プログラム全体に対する感想や意見を自由記述で記入してもらった。

結果

プログラム全体の印象

プログラム全体の印象を尋ねる4項目について、学校ごとに記述統計量を算出した(Table 2, Table 3)。その結果、いずれの学校においても、「よかった」「勉強になった」は、平均値が4点を超過しており、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした生徒の割合は85%を超えていた。「ひきこまれた」については、平均値が3.69点、3.73点であり、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした生徒の割合は約6割であった。「感動した」については、平均値が3.32点、3.21点とやや低く、「どちらともいえない」と回答した生徒と肯定的な回答をした生徒がほぼ同じ割合であった。

万引きに関する実感

万引きに関する実感を尋ねる7項目につい

Table 2 プログラム全体の印象の記述統計量 (附属坂出中学校)

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①よかった	1 (0.85)	1 (0.85)	11 (9.40)	52 (44.44)	52 (44.44)	4.31	0.75
②感動した	4 (3.45)	16 (13.79)	48 (41.38)	35 (30.17)	13 (11.21)	3.32	0.97
③勉強になった	0 (0.00)	0 (0.00)	5 (4.24)	42 (35.59)	71 (60.17)	4.56	0.58
④ひきこまれた	2 (1.69)	6 (5.08)	42 (35.59)	45 (38.14)	23 (19.49)	3.69	0.90

注. 数値は各選択肢の人数を示す (括弧内はパーセンテージ)。

Table 3 プログラム全体の印象の記述統計量 (附属高松中学校)

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①よかった	0 (0.00)	1 (0.82)	11 (9.02)	56 (45.90)	54 (44.26)	4.34	0.68
②感動した	9 (7.38)	16 (13.11)	48 (39.34)	38 (31.15)	11 (9.02)	3.21	1.03
③勉強になった	0 (0.00)	0 (0.00)	4 (3.31)	41 (33.88)	76 (62.81)	4.60	0.56
④ひきこまれた	3 (2.46)	11 (9.02)	33 (27.05)	44 (36.07)	31 (25.41)	3.73	1.02

注. 数値は各選択肢の人数を示す (括弧内はパーセンテージ)。

Table 4 万引きに関する実感の記述統計量 (附属坂出中学校)

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した	0 (0.00)	1 (0.86)	32 (27.59)	53 (45.69)	30 (25.86)	3.97	0.76
②警察に通報することの重要性を実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	4 (3.39)	44 (37.29)	70 (59.32)	4.56	0.56
③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	13 (11.02)	40 (33.90)	65 (55.08)	4.44	0.69
④万引きする側にも背景があることを実感した	1 (0.85)	0 (0.00)	15 (12.71)	50 (42.37)	52 (44.07)	4.29	0.75
⑤悪いということをわかっている万引きをしてしまうことを実感した	1 (0.85)	0 (0.00)	16 (13.56)	47 (39.83)	54 (45.76)	4.30	0.77
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した	0 (0.00)	0 (0.00)	7 (5.93)	35 (29.66)	76 (64.41)	4.58	0.60
⑦万引きをするとどういふ措置 (対応) が取られるのかを実感した	0 (0.00)	1 (0.85)	9 (7.63)	48 (40.68)	60 (50.85)	4.42	0.67

注. 数値は各選択肢の人数を示す (括弧内はパーセンテージ)。

て、学校ごとに記述統計量を算出した (Table 4, Table 5)。その結果、附属坂出中学校における「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」を除き、すべて平均値が4点を超えており、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした生徒の割合は8割以上であった。特に、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感

した」の得点が高く、肯定的な回答をした生徒の割合がいずれの学校においても85%以上であった。

万引きに対する態度

万引きに対する態度を尋ねる12項目について、2つの学校のデータを併せて確認的因子分析を行った (Table 6)。尺度作成時に想定した4側面を潜在変数、それぞれ3項目を観測変数とした。その結果、適合度はCFI=.96、

Table 5 万引きに関する実感の記述統計量（附属高松中学校）

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	非常にあてはまる	Mean	SD
①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した	1 (0.82)	2 (1.64)	16 (13.11)	58 (47.54)	45 (36.89)	4.18	0.78
②警察に通報することの重要性を実感した	0 (0.00)	2 (1.64)	5 (4.10)	33 (27.05)	82 (67.21)	4.60	0.65
③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	0 (0.00)	2 (1.64)	8 (6.56)	36 (29.51)	76 (62.30)	4.52	0.70
④万引きする側にも背景があることを実感した	2 (1.64)	3 (2.46)	11 (9.02)	50 (40.98)	56 (45.90)	4.27	0.85
⑤悪いということをわかっている万引きをしてしまうことを実感した	2 (1.65)	4 (3.31)	7 (5.79)	41 (33.88)	67 (55.37)	4.38	0.87
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した	0 (0.00)	1 (0.82)	3 (2.46)	27 (22.13)	91 (74.59)	4.70	0.56
⑦万引きをするとどういふ措置（対応）が取られるのかを実感した	1 (0.82)	2 (1.64)	12 (9.84)	37 (30.33)	70 (57.38)	4.42	0.80

注. 数値は各選択肢の人数を示す（括弧内はパーセンテージ）。

Table 6 万引きに対する態度の確認的因子分析結果

	因子負荷量	Mean	SD
万引きをした（しそうな）人へのかかわり			
①万引きをしまいそうな人がいたら、その人の気もちや背景をわかってあげたいと思う	.75	3.90	0.97
②万引きをしまいそうな人がいたら、そうしなくてもいいようにかかわってあげたいと思う	.71	4.11	0.91
③万引きをしまった人がいたら、できる限りその人のことを理解してあげたいと思う	.76	3.82	0.99
万引きをしない効力感			
④これから先、自分は万引きをしないと	.74	4.77	0.57
⑤万引きをしそうになっても、その気もちを抑えることができると思う	.80	4.55	0.77
⑥人から万引きに誘われても、きちんと断ることができると思う	.80	4.59	0.64
万引きに関する情報探索			
⑦万引きに関するニュースや話題に目を向けていきたいと思う	.85	4.09	0.86
⑧万引きの背景や現状のことを常に知っておきたいと思う	.86	4.11	0.90
⑨機会があれば、万引きのことを他の人と話し合ってみたいと思う	.78	3.70	1.04
地域づくりへの意欲			
⑩万引きが起こりにくい社会や地域を作っていきたいと思う	.78	4.46	0.66
⑪まわりの人が万引きをしなくてもいいような社会になればよいと思う	.82	4.66	0.52
⑫万引きをしても立ち直ることができる社会や地域であってほしいと思う	.48	4.48	0.82

RMSEA = .07と十分な値が示されたため、想定した4因子に対応する4下位尺度として使用することとした。1つ目の下位尺度は、「万引きをしまった人がいたら、できる限りその人のことを理解してあげたいと思う」など、万引きをした人やしそうな人に対する積極的なかかわりを示す3項目からなる「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」である（ $\alpha = .78$ ）。2つ目の下位尺度は、「人から万引きに誘われても、きちんと断ることができると思う」な

ど、万引きをしないことに対する自信を示す3項目からなる「万引きをしない効力感」である（ $\alpha = .81$ ）。3つ目の下位尺度は、「万引きの背景や現状のことを常に知っておきたいと思う」など、万引きに関する情報を収集しようとする態度を示す3項目からなる「万引きに関する情報探索」である（ $\alpha = .86$ ）。4つ目の下位尺度は、「万引きをしても立ち直ることができる地域であってほしいと思う」など、万引きのない地域づくりに対する志向性を示す3項目からな

る「地域づくりへの意欲」である ($\alpha = .67$)。それぞれ3項目の合計得点を下位尺度得点として算出した (Table 7)。

各下位尺度の理論的な中央値は9点である (各項目に「3:どちらともいえない」と回答した場合)。この9点と4下位尺度の平均得点との差を *t* 検定によって調べたところ、附属坂出中学校 ($t = 13.51 \sim 33.27, p < .001$), 附属高松中学校 ($t = 12.11 \sim 36.99, p < .001$) のいずれにおいても有意な差がみられた。

万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との関連

2つの学校のデータを併せて、万引きに対する態度の4下位尺度とプログラム全体の印象との相関係数を算出した (Table 8)。4下位尺度のいずれも、プログラムの全般的な印象4項目すべてと有意な正の相関を示した。特に、万引

きに関する情報探索、地域づくりへの意欲は、4項目との相関が比較的強かった。一方で、万引きをしない効力感の相関がやや弱かった。

2つの学校のデータを併せて、万引きに対する態度の4下位尺度と万引きに関する実感との相関係数を算出した (Table 8)。4下位尺度のいずれも、万引きに関する実感7項目すべてと有意な正の相関を示した。特に、万引きに関する情報探索は、7項目中5項目と4以上の相関がみられ、全体的に万引きに関する実感との関連が強くみられた。同様に、地域づくりへの意欲も7項目中4項目と4以上の相関がみられた。

プログラム中の生徒の様子

いずれの中学校においても、プログラムに対して大部分の生徒は関心をもって意欲的に参加していた。ワークシートへの記入やグループで

Table 7 万引きに対する態度の記述統計量

	附属坂出中学校		附属高松中学校	
	Mean	SD	Mean	SD
万引きをした (しそうな) 人へのかかわり	11.86	2.27	11.79	2.53
万引きをしない効力感	13.92	1.61	13.93	1.75
万引きに関する情報探索	12.08	2.45	11.74	2.53
地域づくりへの意欲	13.47	1.73	13.72	1.41

Table 8 万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との相関係数

	万引きをした (しそうな) 人へのかかわり	万引きをしない効力感	万引きに関する情報探索	地域づくりへの意欲
①よかった	.32***	.15*	.41***	.35***
②感動した	.25***	.21***	.40***	.28***
③勉強になった	.30***	.17**	.33***	.43***
④ひきこまれた	.20**	.16*	.36***	.33***
①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した	.27***	.25***	.42***	.27***
②警察に通報することの重要性を実感した	.40***	.35***	.50***	.44***
③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	.34***	.32***	.49***	.48***
④万引きする側にも背景があることを実感した	.46***	.15*	.29***	.28***
⑤悪いということをわかっているにもかかわらず万引きをしてしまうことを実感した	.22***	.17**	.30***	.24***
⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した	.25***	.29***	.47***	.59***
⑦万引きをするときどのような措置 (対応) が取られるのかを実感した	.36***	.30***	.50***	.41***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

の話し合いにも、積極的に取り組んでいた。特に、DVD視聴の際には、登場人物に対する印象を個々に発言する生徒もいたが、ストーリーが進む中で静謐に集中して視聴している様子が見られた。アンケートの自由記述で、「今日みたビデオがとても勉強になった」「DVDで万引きの様子を説明していたのでわかりやすかった」などの感想がみられたことから、動画によるストーリーの提示が生徒の興味や理解にとって効果的であったと考えられる。また、グループでの話し合いの結果を全体で共有する場面では、挙手をして意見を述べる生徒も多くみられた。

DVDの視聴の際、先に実践を行った附属坂出中学校では、ストーリーの中盤で一度DVDを止め、今後の展開を予想させた。このことによって、生徒は自分の予想との対比のなかで意外性をもって後半を視聴することができたと思われる。その一方で、途中でストーリーを止めたことによって、やや集中が途切れた面があったかもしれない。また、プログラム全体の時間を長くしてしまう面もあった。後で実践を行った附属高松中学校では、DVDを止めずに最後まで一気に視聴させた。この方法の場合、生徒は集中力を切らさずに視聴することができ、またプログラム全体のなかで考えるべきポイントがより明確になったと思われる。

考察

本論文では、中学生を対象に、万引き防止のための教育プログラムを作成し、その実践事例を報告した。教育プログラムの構成については、①万引きに関する正しい知識を獲得すること、②万引きの背景と対策を自ら考えること、の2つを大きな柱として設定した。今回作成した教育プログラムの特徴は、万引きの実態や特徴に関する調査データ（香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業、2011）に基づいて構成されている点と、教育現場への普及を考えて現職教員と共同的にプログラムを作成していった点にある。以下に、生徒に対するアンケートの

回答をもとに教育プログラムの効果を検討していく。

プログラム全体の印象について、参加した生徒からは概ね肯定的な評価が得られた。特に、「よかった」「勉強になった」の2項目については、肯定的な回答をした生徒が85%を超えており、プログラムが受講する側にとっても肯定的なものとして捉えられ、かつ学習効果もあったと考えられる。「勉強になった」に対する肯定的な回答は、クイズによって新たな知識を獲得したこととDVDの登場人物の背景を自分なりに考えたことにあると推察される。クイズに関しては、香川県における万引きの多さや、万引き犯罪の成立要件など、中学生にとってあまり知られていない事実を取りあげた。また、万引きに対して三者三様の反応を示す登場人物について、その内面や背景を自分なりに考えたことが、学習効果を促したとも考えられる。アンケートの自由記述では、「今まで知らなかった万引きをする人の気持ちもわかってよかった」「実際にその立場になって考えたので、分かりやすかった」などの回答がみられた。これらのことが、「勉強になった」という評価の背景にあるものと考えられる。

万引きに関する実感についても全般的に肯定的な回答が得られた。特に、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」については、いずれの学校においても85%以上の生徒が肯定的に評価していた。香川県においては、万引きを発見した際にはすべて警察に通報するという全件通報制を推奨しており、今回の教育プログラムではクイズとDVDの両方でその点を強調した。万引きの再犯防止にとって全件通報は重要とされているため、この点に対して肯定的な回答が得られたことはプログラムの効果として注目すべきものである。また、まわりの人の対応について、DVD内で万引きにかかわった3人の少年に対して、その保護者が三者三様の反応をしており、その心情や影響についてグループで話し合ったため、強く実感できたものと考えられる。アンケートの自

由記述では、「万引きをしている人には、親に構ってほしいと思っている人もあり、家族内での信頼関係も重要だと思いました」「万引きを私がするとお母さんと先生など、たくさんの人に迷惑をかけることがわかりました」などの感想がみられた。万引き被疑者において、家族からの否定的な反応を予想することで、万引きに対する後悔が高まることが示されている（大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富他, 2012）。今回の教育プログラムの効果として、保護者の対応や親子関係と万引きとの関連性に対する視点をもったことは重要な点であるといえる。

万引きに対する態度として、「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」「万引きをしない効力感」「万引きに関する情報探索」「地域づくりへの意欲」という4つの側面での効果を想定した。このなかで、「万引きをしない効力感」と「地域づくりへの意欲」については平均得点が高く、教育プログラムの効果があったと考えられる。青少年の万引きでは、友人関係のなかで生じるものが多く、その典型的なストーリーをみたことによって、万引きの実際や対応の仕方を具体的に考えることができたものと思われる。自分が同じような状況に置かれた場合に取るべき行動を考えやすくなり、自分は万引きをしないという効力感が高まったものと考えられる。一方で、自由記述に「難しいかもしれないけど、きちんと断ることが大切だと思った」という回答があり、万引きをしないために友人と対峙することの大切さと難しさに思い至った生徒もいたと推察される。中学生の時期は友人や仲間からの同調圧力やプレッシャーが大きくなる時期であるが（落合・佐藤, 1996）、万引きをしないために友人からのプレッシャーをいかに処理できるかを考えていくことが、プログラムを受けた後の課題になる。

また、教育プログラム全体の印象および万引きに関する実感は、万引きに対する態度の4側面と正の関連がみられた。つまり、プログラムに対して肯定的な印象をもち、多くの知識を実感した生徒ほど、万引きの防止に向かう態度をもったといえる。特に、万引きに関する情報探

索は、プログラム全体の印象の2項目、万引きに関する実感の5項目と.4以上の相関がみられ、4下位尺度の中でもっとも関連が強かった。今回の教育プログラムをきっかけに、生徒が万引きに問題意識をもって自ら情報を集めたり、その動向に目を向けたりすることは、学習効果の持続性を考えるうえで不可欠である。そのためには、教育プログラムを肯定的なものとして経験し、多くの知識を得られたと感じられるように実践を行うことが重要なポイントであるといえる。

今回の教育プログラムでは、万引きに関する正しい知識を獲得することと万引きの背景と対応策を多様な視点から考える姿勢を身につけることを主要なねらいとしていた。大部分の生徒は、プログラムが勉強になったという印象をもち、万引きに関する様々な事実に実感していたことから、概ね正しい知識を習得できたといえる。また、自分が万引きをしないという効力感をもち、万引きに関する情報を探索したり、万引きをした他者にかかわろうとする姿勢をもったことから、万引きを多様な視点から考える視点をもてたと考えられる。知識の習得とともに、万引きの背景を考える今回の教育プログラムは、青少年の万引き防止に対して有効な対策となり得るだろう。

今後の課題は、より多様な中学校で今回の教育プログラムを実施し、効果を確認することである。今回の対象者は、2校とも国立大学法人の教育学部附属中学校であり、先駆的な教育プログラムに順応しやすい面があったかもしれない。一般の公立中学校や私立中学校においても、同様の効果がみられるかどうかを検証していく必要がある。また、今回作成した教育プログラムは、広く教育場面に普及させていくことが目指されている。実践に関して、DVDを途中で止めるか否かやクイズの解答の説明の仕方には、クラスによって若干違いがあった。その違いは個々の教員の指導方針や教授態度を反映した部分であり、教育プログラムを普及させていく過程において必然的に生じ得るものである。学校現場の教員がより実施しやすいように

プログラムの実施手順を考えつつ、多くの学校で実践を積み重ねていくことが必要である。

引用文献

- 秦政春 (2000). 子どもたちの規範意識と非行・問題行動 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 26, 123-155.
- 香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業 (2011). 万引き防止対策に関する調査報告書 香川大学・香川県警察
- 小林寿一 (2008). 非行を未然に防止する活動 小林寿一 (編著) 少年非行の行動科学—学際的アプローチと実践への応用 北大路書房 pp. 116-147.
- 根岸千悠 (2011). 「犯罪について考える」授業の開発—犯罪の実態と認識の乖離および環境犯罪学に着目して— 授業実践開発研究, 4, 37-44.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16, 286-299.
- 小保方晶子・無藤隆 (2006). 中学生の非行傾向行為の先行要因—1学期と2学期の縦断調査から心理学研究, 77, 424-432.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 大久保智生 (2012). 青少年の万引きに対する規範意識: 香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 (印刷中). 万引きに関する心理的要因の検討: 万引き被疑者を対象とした意識調査から科学警察研究所報告, 62
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・永富太一・時岡晴美 (2012). 万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討: 家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響 子育て研究, 2, 13-20.
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・宮前淳子・宮前義和・岡田涼・七條正典 (2012). 一般の青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因の検

討: 世代によって万引きへの意識はどのように異なるのか 香川大学教育学部研究報告第I部, 138, 1-10.

- 大久保智生・時岡晴美・有馬道久・松浦隆夫・高橋護 (2012). 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について (その2)—動画の視聴者の評価と参画した大学生と中学生の意識調査から— 香川大学教育実践総合研究, 25, 57-68.
- 皿谷陽子・三阪梨紗・濱本有希・平伸二 (2011). 万引き被害者の特徴に関する質問紙調査 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 45-52.
- 時岡晴美・大久保智生・有馬道久 (2012). 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について (その1)—青少年編「万引きはゲームじゃない」のDVD制作による啓発効果を中心に— 香川大学教育実践総合研究, 24, 153-160.

付記

本研究は、平成24年度公益財団法人マツダ財団マツダ研究助成 (研究代表者: 大久保智生) を受けて行ったものである。